

2022年10月23日 礼拝説教要旨  
詩編講解説教125「神はわがやぐら」  
詩編125：1～5、ルカ15：11～20

詩編第125編も120編から続く一連の巡礼の歌であります。巡礼者たちがエルサレムに近づいてまいりますと、地形、特にその土地の高低差に驚くのではないかと思います。エルサレムの市街地は周囲を城壁で囲まれておりますが、その城壁を取り囲むように特に南側半分は谷になっておりまして、キドロンの谷、ヒンノムの谷があります。反対にエルサレムは高台になりますので、谷から眺めますとエルサレムは際立って山の上にあるように見えます。1節に「シオンの山」とありますが、しばしばエルサレムを「シオンの山」と呼ぶのはそういう理由があります。また2節には「山々はエルサレムを囲み」とありますが、谷を越えて東側にはオリブ山、北側もスコポスの山があります。地形的にはパレスチナ山地ですからエルサレムはまさに自然の要害、砦であると言われます。

詩編には「主はわたしの岩、砦、逃れ場」（18：3）という表現が多くあります。巡礼者たちはエルサレムに入る時に、自分たちがそのような堅固な砦の中に入っていき感覚を覚えたのかもしれません。砦の中で守られる。そういう安心感がこの詩の中心にあります。それゆえにこの詩は最後「イスラエルの上に平和がありますように」（5節）という言葉で閉じられます。この「平和」「平安」（シャローム）は巡礼者たちがエルサレムに巡礼するたびに肌で実感したものであったに違いありません。危険な旅が終わり心から安心できる。主の御前に帰り着く。それが平和なのです。

それは今日のわたしたちにももちろん通じることであります。わたしたちも礼拝を目指してこの世を旅する巡礼者です。一週間の生活を終えてこの礼拝堂に足を踏み入れること、そこにすでに安心があります。それは神さまの懐の中に迎え入れられるような感覚なのかもしれません。放蕩息子の話を思い出します。父親の財産の分け前をもらい、それを全部お金に換えて放蕩三昧の生活をする。すべてを使い果たし、すべてを失って彼は着の身着のまま父親のところに戻ります。なんと父親はその息子を赦して受け入れるのです。「まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した」（ルカ15：20）その存在そのものが受け入れられ、承認され、守られる。その時にわたしたちは本当に安心できるのです。人生でそういう場所を持つことは幸いです。

社会的包摂（ソーシャル・インクルージョン）という言葉があります。特に社会的な弱者、子どもや高齢者、体の不自由な方、病いを抱えている方に寄り添い、社会全体で支えていくような社会のあり方を目指すものです。排除ではなく、インクルージョン、包み込むイメージです。けれども世の中は決してそうではありません。能力主義、成果主義で、勝ち残っていく者が評価される。あるいは上手に世の中を渡っていくことができる人だけが生き残れる。「主よ、良い人、心のまっすぐな人を幸せにしてください。よこしまな自分の道にそれて行く者を、主よ、悪を行う者と共に追い払ってください」（4～5節）ここには正直者が馬鹿を見る。「良い人、心のまっすぐな人」が報われない社会の現実が示されています。そういう社会はどこか間違っているのです。特にこのコロナ禍、そして戦争によって、世の中は分断や対立が進んでいます。また経済の問題もあります。そういう殺伐とした中で、人々の心も生活も荒んでいきます。

でもわたしたちには帰る場所がある。ここに来れば安心という場所があるのです。基本的に教会はそういう場所です。それは神さまの懐、力強い守りの中に入ること。自分が強くあることではありません。自分は弱くていい。神さまの砦が堅固なので、自分が強くなる必要はないのです。それが洗礼を受けるということです。わたしたちは自分が強くなるために洗礼を受けるわけではありません。むしろ弱さを抱えたままで、ありのままに神さまの懐の中に飛び込むこと。砦の中に入ること。そこでこそ、わたしたちは自分自身を取り戻し、自分らしく歩いていくことができるのです。世の中に適応できないことを嘆く必要などありません。適応できなくて当たり前です。そこではありのままを生きられないのですから。わたしたちはどこで自分を取り戻し、どこで心からの安らぎを得るのでしょうか。改めて考えてみてください。

先日、帰省して父の10年の記念会をしました。父は亡くなる二年前2010年の8月に招かれてここで説教をしています。一時間に及ぶ説教ですが、先日、久しぶりにその説教の録音を聴きました。「最高の人生」という題の説教です。出エジプト記20章の十戒、ロマ書7章の「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう」というパウロの言葉からの解き明かしであります。人間の罪を語り、キリストの贖い、神の赦しを語る正統的な説教です。特に人間の罪については多くの時間を割いて語っております。最後、結びでこう言います。「コーラム・デオ、神の御前に謙虚であれ。その時、聖霊が働いて命を与えるでしょう。その命の源である信仰を生起させるでしょう。それが創造者である神の懐に飛び込んだ姿、最高の人生です」と。「謙虚であれ」というのは、自分を誇るのではなく、ありのままの姿、惨めな姿のままでということです。ボロボロの放蕩息子のままでいい。そのまま神の懐に飛び込め。砦の中に入れ。それが最高の人生なのだ。それだけで人生は報われるのだ。そう熱く語っておりました。

地区の婦人部の研修会が行われました。渡辺善忠先生を招いて教会音楽の話をしていただいた。その中でルターの「神はわがやぐら」のコラールを数人の作曲家のアレンジで演奏されました。そして最後は皆で神はわがやぐらを歌いました。宗教改革記念日を前にしてふさわしい集会ができたと思います。「神はわがやぐら」を作ったルターも何よりその神さまの懐に飛び込む経験をした人です。それまでルターも自分の行為に執着しておりました。自分に何ができるか。何をすべきか。でも救いは神さまの恵みであって、自分の行いではない。そのことに気づかされた。そこから改革運動が始まりました。「神はわがやぐら」を作った時、ルターもまた激しい戦いの中にあっただけと言われます。四面楚歌のような状況の中にあっただけでも自分の力で戦うのではない。神さまが砦、わがやぐらとなって守ってくださる。キリストがその矢面に立ち十字架で死んでくださった。命をかけてわたしたちを罪から守ってくださった。その平安が彼の根底にありました。この絶対的な神さまへの信頼こそ、わたしたちが受け継ぐべき信仰です。